日本人としての通訳者

三重 綾子

「アメリカの雰囲気に憧れ、アメリカの全てが日本より優れている。」これ
は私が中学三年生の時から潜在的に思い描いていた事だ。アメリカを夢見て,
アメリカに住みたくてアメリカに留学した。それは高校二年生の時だった。
そして高校を卒業して立教大学法学部に入学したが、英語ずきがこうじて,
英語のクラスは本業の法律の勉強よりも熱を入れて参加している。新聞を英
語で読み、英語のペーパーバックスを読み、手紙も英語で書く。これが私の
ライフスタイルである。私にとって英
語とは何かときたから、それはただ
「好きなもの」ではなく、「それなし
ではいない生活の一部、そして私
の全て」と答えただろう。鳥飼先生の
授業を受けるまでは。

そもそも私が鳥飼先生の同時通訳の
授業をとったのは、実際に通訳を目指
しているからである。四月当初は今ま
での大学の英語の授業との違いに少し
とまどったが、やがて授業にもなれ、
興味深い授業が展開されていった。私
が先生の授業で最も印象の残ったもの
は「ここが変われば日本人」というパラ
エティ番組のコソボ問題特集で日英・
英日の逐次通訳をしたときのことだっ
た。私はこの番組は好きで毎回見てい
るのであるが、その時は外国人の不思
議な法則というものに気がついた。こ
れは知人から進められて読んだ鈴木孝
夫著の「日本人はなぜ英語ができない
のか」においても論じられている事な
のだが、アメリカ人パネリストは必ず
といっていいほど「だから日本は駄目
なんだ！」という風に日本を攻撃する。
一方中国人は日本を攻撃はするのだ
が、それと同時に「だから中国は素晴らしい」という風に、中国の素晴らしいを伝染する論法に論議を摩擦して
しまうのである。鈴木孝夫氏によれば
アメリカは言語を学ぶ理由を攻撃型,
中国は自己誇示型という分類していた。

では日本人はどうなのか。同氏によ
れば、日本人は英語を日本語よりも優
れたものとして、そして英語を学ぶ事
によって自分、そして社会を改善した
いという、自己・社会改造型だという。
私も鈴木氏も分類は正しいと思う。実
際私自身がそうであり、私の周りの同
じように英語を学ぶ人はみなそうだか
らだ。これは英語を学ぶ動機としては
十分である。しかし通訳者が深層心理
で、「英語は日本語よりも勝っている、だから英語を使ってこそ自分は躍進できる」と日本語を否定的に扱い日本語のインプットを怠っていたとしたらどうか。

日本人の通訳者として仕事をするのであれば、まれなケースもあるが、フランス語の国際会議をドイツ語にというものはなく、日本語を外国語に、外国語を日本語にというように、日本語がずぶ介在する仕事であるに違いない。そこで仮にも日本語のインプットを怠ってきた通訳者であれば、まず正しく通訳するという作業はできないのではないでしょうか。

鳥飼先生の授業を通して、何度か英日の通訳をする機会があったが、これは私にとっては大変に難しいことだった。普段、英語ばかりのインプットにおわれ、日本語のインプットを怠っていた私には、流暢な日本語訳どころか、意味さえ通じない、つたない日本語訳となってしまうことが多々あった。

このことを痛感したのが、まさにマクベイン博士講演会であった。博士の講演の原稿は事前に渡されていたから良かったのだが、その後の質疑応答の時は、正にリアルタイムの通訳だったため、何度も頭の中に真っ白になり、鳥飼先生の熟練したフォローで何とか乗り切ったといった感じだった。やはりこの時も、日本語をいかに巧みに、的確に操るかということが問題だった。私はこの時ほど自分の日本語能力の無さ、そして日本語の語彙の少なさを痛感したことはなかった。的確な言葉が出てこない為に、多くの誤解、国家のトップ同士の国際会議においてはそれが戦争の引き金になることもありうる。そして、この様々な場の架け橋をしているのが通訳者の訳語である。

今まで私は、通訳とは英語が出来さえすれば良く、とにかく英語の読み書き、そして話すことが第一のプライオリティだったと思っていた。しかし、鳥飼先生の授業やマクベイン博士の講演会での経験を通して、本当に当たり前のことではあるが、改めて日本語そしてその背景にある日本文化を理解することの大切さを体感できた。言葉は文化と表裏一体である。言語も文化も生き物であり、刻々その姿を変えている。英語のそれが常に新しくなる様に、我々大和民族がこの地球に生を受けてから使っている美しい日本語も文化と共に瞬間瞬間にその姿を新しいものにしている。我々は文化に触れて言葉というものを知り、言葉を理解することによって、文化を伝えていく使命があると思う。だから、それを使う我々は敏感にそれをインプットしていかなければならないのではないか。

私にとって英語とは何かと今聞くから、「それなしではいられない生活の一部、そして、日本文化と他文化の『架け橋』として日本語と共に磨きをかけていきたいもの。」と答えるだろう。そして、美しい的確な日本語訳のできる通訳者にいつの日かなりたい。

（みえあやこ 本学法学部法学科3年次）